

---

# 沈黙の星

森野樹海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沈黙の星

### 【Nコード】

N06890

### 【作者名】

森野樹海

### 【あらすじ】

短編集的な感じでよろしく願います。

## 竜将寺・マスタングフィールド・誠一

俺の名前は竜将寺・マスタングフィールド・誠一。殺し屋だ。

なぜこんな暗い商売をやっているかというと過去の因縁という奴だ。こればかりはどうしようもない。俺の中に棲んでいやがる悪魔、ラファシエルが毎晩毎晩血を欲しがりやがるから、都合のいい商売ではあるな。

俺の敵は首長賊。こいつらは不死者だ。夜の街に亡霊のように現れては人を食う。そう、所謂ゾンビだ。酒場の便所に吐き捨てられたゲロのような存在である。その中でも力のある奴らは賊長と呼ばれる。こいつらが俺の敵であり、ラファシエルの餌だ。

宿敵、グランドール三世・ピエトロ・エグマニール男爵。俺の戦いはこいつを仕留めるまで終わることはないだろう。

「うおおおおおおおおおおお！　くたばりやがれビチグソがああああああああ！！」

夜の街に響き渡る俺の絶叫。近所迷惑だが仕方がない。男は敵を倒すとき、叫びを上げるものだからだ。そう、これは勝鬨だ。下品な内容なのも仕方ない。男は下品でなければならぬからだ。

そうして俺は腐れゾンビにトドメを刺す。俺の必殺の技であるところの『超強裂帛死線弾』をぶちかましてやるのだ。傍から見ればただ輪ゴムを飛ばしているように見えるだろう。だが違う。それは素人の意見だ。俺は違う。玄人だ。故にわかる。この技の恐ろしさを。

「くそつ・・・俺の輪ゴムが弾かれやがる！！」

どうすりゃいいんだ。こんな化け物相手に！

考える。考える考える。考える考える考える。考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える。

[illegible]

第三部・完

## 英雄挽歌

説明しよう！ 暁太一は亜空間ファイバーエネルギーを右腕のブレスレットから得ることにより暗黒勇者 サンダーZへと変身するのだ！！

荒野に突き刺さった丸太。そこに括り付けられている女性 サツキさん。彼女を守護するかのように、斧を持った怪物が立ちはだかる。

「おのれ怪人ピクルスめ！ サツキさんを人質にするとはいふがぞ！」

「きゃーたすけてー」

「待っていてくれサツキさん！ 君は必ず僕が助け出してみせる！」  
瞳に炎を宿らせて、暁太一は叫んだ。その右腕を天高く掲げる。

「人間に正体を知られたら俺はカタツムリにされてしまうが、しょうがない。サツキさんを助けるためならば俺は喜んでカタツムリになり、マイマイカブリに食われよう！ いくぞッ！ 変身ッ！」

掲げた右腕のブレスレットがまるで太陽のように輝き、光が太一の姿を隠した。それは一秒にも満たない時間だった。光が掻き消え、勇者が現れる。

「天が振るえ、地が割れる！ 暗黒勇者！ サンツダアアアッゼエエエエツツツッ！！ 只今ッ！ 見ッ参ッ！！」

3メートルはあろうかという紫のマフラーが風になびく。真っ赤な全身タイツに黄色のフルフェイス。鎧なのだろうか、防弾チョッキのような金色のベスト。そこには、異形の戦士・サンダーZが立っていた。

「か弱き乙女を盾にするなど、神が許しても私が許さん！！ 怪人ピクルスめ！ 塵に変えてくれるわ！！」

「そ、そんな…… 太一さんが暗黒勇者サンダーZだったなんて……ッ！」

戦くサツキさん。暗黒勇者サンダーZの正体が恋人の暁太一だったのだ。当然の反応だろう。確かに俺は君をだましていたかもしれない。だが、俺は決して君を裏切ったりはしない！

安心してくれ、サツキさん。もう大丈夫だ。サンダーZが現れたからにはもうなにも恐ろしいことなどない。そう。俺こそが。暁太一こそが。

君のヒーローだ！！

「現れたな暁太一！ いや、サンダーZッ！！ 積年の恨み、ここで晴らしてくれるわ！！」

巨大なアリの姿をした怪人、ピクルスはその手に持った斧をサンダーZめがけて投げ捨てた。造作もなく、片手で受け止めるサンダーZ。が。

斧はサンダーZが受け止めた瞬間に爆発した。まるで原爆写真のようなキノコ雲が上がる。

「ぶわははは！ バカめ、それは斧に見せかけた強力な斧型爆弾だッ！」

「た…… 太一さああああああん！！」

泣かないでくれサツキさん。俺は君を悲しませたりはしない。なぜなら俺は、暗黒勇者サンダーZだからだ！

爆風から躍り出る影、いや、サンダーZ。

「ふおおおおおおわあああああああッ！！」

振りかぶる。これはただの拳ではない。暁太一の貧弱な拳ではない。岩を粉碎し、鉄を粉と砕く鋼の拳。サンダーZの拳だ！

「ば、ばかな！ あれだけの爆発を受けて無傷だとッ！？」

驚愕する怪人ピクルス。その一瞬が、怪人の命運をわけた。一切の防御が間に合わず、戦慄の表情を浮かべる顔面に、鉄拳が容赦な

く突き刺さる。大切な何かが、壊れる音がした。

「げギョウウウウゲエエエエエエエ」

奇声とともに、怪人ピクルスは絶命した。怪人の名に相應しい、壮絶な最後であった。

夕日を背景に、抱き合う影。暁太一とサツキである。

「太一さん……たとえあなたがサンダーZだとしても、私の気持ちは揺るぐことはないわ」

「サツキさん……」

「たとえあなたがカタツムリになつたとしても……私はあなたを愛し続けるわ……永遠に！」

初めてのキスは少ししょっぱかった。

最後のキスは涙の味がした。

俺は幸せ者だ。こんなにも美しい人に愛されたのだから。

あなたにならなをされてもかまわない

結婚生活はすでに地獄となっていた。ひとつひとつのしぐさ

例えば前髪をかき上げた後に耳に触ること、例えば紫煙を吐くときに薄くまぶたを閉じること。そのすべてに嫌気が差す。存在そのものを否定してしまいたかった。

子供のままごとは一瞬の夢を詰め込んだ理想だったのだと、そう思い知らされたのはいつのことだっただろうか。幸せだったはずの結婚は、いつしか屍の真似事のようになってしまっている。そこには欠片ほどの幸福もなかった。

歯車を狂わせたのは夫のほうであった。古い記憶をたどればそのはずである。よくある浮気話、それが絶望の扉を開けるきっかけになった。

重要なのは信頼、信用。それを失ったとき人は絶望する。そう、例えば私のように。

視界が薄暗いと感じるのは、思考が半ば停止していたからに他ならない。状況を理解できていない夫が私を見上げている。瞳の色は黒い。それは闇の中でさえもはつきりと見ることが出来た。

呻きだろうか。くぐもってよく聞き取れないが、夫は何かを伝えようとしているように見えた。涙を浮かべながら、夫が残した言葉、嗚咽を漏らしながら泣きじゃくる私には聞こえづらかったが、それは確かに謝罪の言葉に聞こえた。

今生の別れ際に、いったい何を謝りたかったのだろうか。

排水溝に流れる夫の冷たい血液。体温を捨て続ける夫を懸命に暖めようとするシャワー。そして赤い包丁をかつて愛した胸に突き刺して、号泣する私。握り締めた拳は、震えて、しかし決してその柄を離そうとはしなかった。

思えば私は何のために生まれてきたのだろうか。

この人を愛するためだと、そう言い切れた時期もあった。



そして、今はもうその気持ちはない。

この涙は悲しみの涙ではない。そう言い切れるほど心は乾いていた。宇宙に心があるのなら、きつと今の私のそれに近いものに違いない。悲しみではない、寂しさ。

これっぽっちも悲しくなんてないのに、涙が溢れて止まらない。それでもシャワーは、夫の体を温め、私の涙を隠してくれている。

夫から引き抜いた包丁は、もう赤くはなかった。これもシャワーの優しさなんだろう。そんなことを考えながらそれを喉に突きつける。

こんどは優しい夢が見れますように。  
そう祈って。

## 買い物

その日、米がなくなった。盗まれたのではない、食い尽くしたのだ。パンもなければお菓子もない。米を買いに行かなければならなかった。

外は雨だ。空は見渡す限り真っ暗で、晴れる気配はない。

「傘なんてあったかな」

ゴミ箱のようになっていいる傘立てをあさり、コンビ二製のビニール傘を見つける。これ以外の物は、骨が折れていてとても使い物になりそうになかった。

スーパーは近い。歩いて数分である。自転車を使うほどの距離ではないだろう。例えば自転車を使つたとしても、僕の自転車にはカゴがないので米を運べない。つまり歩くしかないのだった。

雨は嫌いだ。僕の横を子供がはしゃぎながら駆けていく。もちろん水が跳ねて、僕のズボンが濡れる。こんな地獄のような世界を僕はなぜ歩かなければならないのか。しかも往復しなければならぬのだ。帰りには、五キロの米を抱えて。憂鬱だった。

スーパーに着いた頃、僕のズボンの裾は色濃く変色していた。まるで水拭き用の雑巾だ。雑巾を絞ることもできずに入店。床がツルツルで滑りやすい。ここも地獄なのか。どうやら平穩は僕の部屋にしかないらしい。

スーパーといつても近年乱立しているような大型店舗ではない。コンビ二が少し大きくなった程度の小さな店だ。しかし、僕の生活の全てはここで事足りるのだ。

米の陳列棚はレジのすぐ近くにある。といつても店自体が小さいので、どこもレジに近いといえは近いのだが。そして僕はあきたこまちを抱えた。重量五キロ。こいつはなかなか腰にくるものがあるな。脆弱な現代人の僕には少々荷が重過ぎるようだ。しかもこいつをこれから部屋まで運搬しなければならぬのだ。もちろん徒歩で。

悪夢だ。

会計を終えて店を出る。当然のように外は雨だった。どうも強くなっているような気がする。鬱だ。

どうやら不幸は僕を自殺へと追い込みたいらしい。米を抱えて傘を開くと、それは見事に壊れていた。骨が二本、あさつての方向に曲がっている。これではもう使い物にならないだろう。

しかし、まだ落胆するのは早い。もう一度店内に戻り、ビニール傘を購入すればいいのだ。さすが僕。天才だ。

傘は見事に売り切れていた。さすが僕。持っていたのは幸運ではなく地雷だったらしい。それも今見事に踏み抜いた。どうやら僕は五キロの重石を雨に打たれながら運ぶ運命の奴隷らしい。死のう。

そうして晴れるわけもない空を見上げていると、ふいに隣から声がした。それが僕を呼ぶ声だと気づくのに、多少時間がかかってしまった。なぜならこんな不幸な僕を呼び止める人間など存在するわけがないからだ。

高校生だろうか。セーラー服姿の少女がそこには立っていた。

「傘……ないんですか？」

哀れむように、彼女は言った。なるほど、今の僕は女子高生も哀れむほどのピエロというわけか。笑うがいいさ。それで君が幸せになるなら僕も幸せだ。嘘だが。

「傘……貸しましょうか？」

少女は女子高生ではなかった。天使だった。慈愛に満ちた微笑を浮かべていらつしやる。そう、それはまさにアルカイックスマイル。

帰り道。もう雨などなにも憂鬱なことなどなかった。僕にはこの傘がある。ピンク色の傘がある。足取りも軽い。五キロの米を抱えているとは到底思えないほどに。

天使が僕に微笑んだ。それだけで僕は満足だ。



## A B C D E

重要なことはいくらかしかないと思う。

地位や名誉、金、女。興味がなないといえは嘘になるだろうが、隣の芝が気になる程度の興味でしかない。つまり自分には縁のないものであり、それらは重要なものたりえないのである。

では、なにが重要なのだろうか。

タバコの煙を死んだ魚のような目で見つめながら、考える。考えたところで答えはない。それは昔からの癖のようなものだった。時間をもてあますと、自然とそれを考えている。答えのない自問自答それは単なる暇つぶしだった。

「自由……とかかね……？」

青空を見上げながら、死んだ魚はつぶやく。それは真実を含まないであろう答え。そして、真実を含む可能性を秘めた答え。

薄く水の張った灰皿に、燃えつきかけたタバコを投げ入れる。くしゅっ、という寂しげな音とともにそれはゆっくり沈んでいった。

青木雄介、二八歳。職業・教師。昼休みの屋上は彼にとっての聖地だった。孤独な空間は思考を空白にしてくれる。タバコが加わればなお良い。

キンコーン。カーンコーン。

昼休みの終わりを告げる無機質な鐘の音が、青木を現実に戻した。ここが学校であることを思い出させてくれる。そこは十数年前までは自分も友人たちと馬鹿騒ぎをしていた場所。そして現在の職場だ。

私の彼は頭が弱い

それは学校の屋上でお弁当を食べている時のこと。

彼はいつものように喋りだした。

「ツンデレってさ、あるじゃん？」

「うん？」

「あれ俺、すげー好きなのよ。だからさ、お前ツンデレになっ  
てく  
んね？」

「はあ？」

私の彼は、  
少しだけ頭が弱い。

いつも唐突にわけのわからないことを言い出すのだ。もちろん脈絡などあるはずがなく、私は彼の思考を理解することなどできない。しかし、だからこそ彼といえると楽しいのだが。

「でさ、ツンデレって俺のイメージだとツインテールなんだけどさ、お前髪短けえじゃん？　なんとかしろよ」

無理だ。何を言い出すのだこのアホは。少しは考えて喋れ。

しかし私は優しいので、やんわりと否定する。

「そんなに急に髪は伸びないよ」

「そうだよなー。まじ人間って不便な」

お前の思う便利な人間は化物か。自由自在に髪を伸ばせる女など、妖怪ではないか。お前はそんな妖怪と付き合いたいのか？

しかし私は優しいので、笑って受け流す。

「ソーくんは髪長いほうがいいの？」

「ばっか、おまえ、だからツインテールだっつってんだろ？ ツインだよツイン。いわゆるダブルよ」

さっぱり意味がわからない。というか、会話になってない気がする。ダブルってなんのことだ？

「そんで俺のイメージだと金髪なのよ。キンパな。でもさ、あれだ

よな。キンパってなんかビッチっぽくね？」

「そうかな？ 別に普通じゃないかな？」

「いやぜってービッチだし。ツンデレでもビッチはダメだよな。ビッチは。だってビッチって口臭そうじゃん。俺、口臭いのダメなんだわ。もうぜってー無理」

そりゃあれか、イカ臭いって言いたいのか？ シモネタかよ。セクハラすぎるだろ。

しかし私は優しいので、セクハラを許してやる。

「まあビッチはだめだよな。私は一途な純愛がいいよ」

「だよなー！ やっぱし純愛だよな純愛！ そんで純愛なツンデレが最高なわけだよな」

なんだ純愛なツンデレって。もっと具体的に説明してくれ。私にもわかるように説明してくれたら、ちよっとくらいやってやるからまあ、彼にそんな説明能力などあるわけないので、ただひたすらに私がその意味を考えるしかない。

なんて面倒なんだ。

「そんで俺の好きなお前が俺の好きなツンデレになったら最強なんじゃねえのかと思うのよ。二倍だよ二倍。ラブ二倍。やばくね？」

やばい。

ラブ二倍だなんて！

そんな、なんて、素晴らしい！！

これはもう、やるしかない。

「ソーくんなんて死ねばいいのに」

私の演技力ではこれが限界だった。

そもそも、どうやってたらツンデレになれるのだろう。やはり先天性のものなのだろうか。

「……………」

とりあえず私が考えた最大級のツンを放出してみたのだが、彼の反応を見るに、どうやら間違えたらしい。おかしいなあ。

「俺………… お前にそんなこと言われたら………… 生きてけないわ…………」

どうやらツンが激しすぎたらしい。彼は燃え尽きた矢吹丈のように真っ白になっている。なんて可哀想な姿なのだろう。

しかし、ここでデレればラブ二倍！

「……………」

「……………」

デレなんて、何も思いつかなかった。

難しい。どうすればいいのだろう。

そうしてしばらく固まっていると、予鈴がなった。無機質な鐘が、私たちの間の沈黙を破る。

「ごめんよ、ミカ。俺…………もう二度とツンデレとか言わねーから。

だから、許してくれよ。まさか、そんなに怒るとは思わなかったんだ……………」

泣きそうになりながら、彼が言う。そんな彼が、捨てられた子犬のようで愛らしい。

しかし、私にはデレがわからない。

このままでは私が彼に死ねと罵声を浴びせただけになってしまう。それはとても良くない。私が望む方向性の真逆だ。

考えて、考えて。

私は彼にキスをした。

物語の最後、ハッピーエンドはいつもキスで終わるのだ。

ああ、もう面倒くさい。

だから物語は、ここでおしまいだ。



## 伝説の破邪賢者

「俺たちオカルト研究会もなんか派手なことやるべきじゃねえのか？」

「そうなのか？」

「毎回よくわからないオカルトスポットの紹介やるだけじゃつまんねえだろ？」

「じゃあ何だよ、お化け屋敷でもやんのかよ」

「そんなのクラスの出し物で十分だろ。俺たちはもっと派手なことをやる」

「どんなだよ？」

そしてニヤリと部長は笑った。

僕は思う。

今年の学園祭は、きっと失敗する、と。

そして僕たちはなぜか女物の下着の展示を始めた。オカルト研の部室を埋め尽くすパンツ、パンツ、パンツ。

「赤、黒、白、美しいな。芸術だな」

どうも部長の頭は受験勉強のしすぎでおかしくなってしまったらしい。下着を手にしては、「やはりシルクが一番……」などと呟いている。もうこの男ダメかもしれない。というかダメだろう。

「そっぴやまだ聞いてなかったけど、こんなにパンツ飾って何すんだよ？」

「売る」

世界が、凍った。

学園祭でパンツを売るなんて、常識で考えて無理だろ。しかも、やたらと際どい下着ばかりが揃っている。売れるわけがない。というか、販売の許可が下りるわけがない。

「前からバカだとは思っていたが、ここまでバカだったとは……。俺は今日限りで退部する」

「まあ落ち着け。俺も学園祭でパンツを売るほどバカじゃない。俺たちはこれからこのパンツで絵を描く。それを売るんだ」

「は？」

「は？」

俺にはコイツが何を言っているのかまったく理解できない。パンツで絵を描く？　せめて、パンツ『に』だろう？

「色とりどりの美しいパンツたちを綺麗に綺麗に並べて、絵を描くんだよ。ドット絵だよ、ドット絵。俺たちは、パンツでパンツの絵を描くんだ」

パンツでパンツの絵を描く。なるほど、それはとても芸術的じゃないか。

俺は、少し興奮しているのを自覚した。

こいつはとんでもないバカだが、いつも俺を楽しませてくれる。愉快的な場所へと連れてってくれる。

なるほど、こいつは燃えてきたぜ！

それから徹夜の日々だった。

情熱が僕たちを突き動かしていく。止まらない、止まらない。眠らない、眠れない。そんな激動の日々が学園祭当日まで続いた。

僕たちは燃えていた。まるで、燻っていたタバコの火がダイナマイトに引火して家が吹き飛んだような、そんな熱い情熱が僕たちを支配していたのだった。

そして、三枚の絵が完成した。

『衝撃の娼婦の勝負』『星を見る夜鷹』『クロワッサンを食べる情婦と犬』

力作だった。これ売ってしまうのかと思うと、少し寂しい気持ちになる。

パンツでこの絵画のように美しい絵が描けるとは。

僕たちは手を取り合って、笑いあった。感動が、そこにはあった。

その夜、僕は久々にゆっくりと眠ることができた。

ベットの横には『衝撃の娼婦の勝負』が飾られている。

僕たちは、作品を手放すことができなかったのだ。販売の予定を中止して、作品の展示だけに留まった。そして、力作の一つを僕は部屋に飾ったのだ。

そこに描かれているのは、騎乗位で腰を振る全裸の女性。それを見ていると、僕はあの時の興奮を思い出してしまう。

燃え尽きることのなかった情熱が、未だに僕の中で燦っているのだ。ムラムラと、情熱を持て余してしまう。

「うっ……ふっ……」

きつと、またあのバカが僕を楽しませてくれるだろう。  
その時まで、僕は、情熱を持て余す。

## ドラゴン由香里

私の名前はドラゴン由香里。16歳。乙女だ。

生まれつき右手が不自由な私は友達が1人もいない。高校に入っ  
たからには私だって友達が欲しい。

そこで学園祭というわけである。

ここで一発デカイことかませば有名になれるだろう。そして、有  
名人はモテる。つまり、友達百人、というわけだ。

そして、学園祭で一番目立つイベントといたらバンドだ。

なので私は決心した。この夏、私はバンドをやるのだ！

しかし、グーグル先生にバンドについて聞いてみたら、驚愕の事  
実が浮き彫りになった。バンドとは、つまり、1人ではできないの  
だ。友達をつくるためにバンドをやるのに、バンドをやる友達がい  
ない。

ああ、神よ！ 私はこの試練に打ち勝てるのだろうか！

そうして私は、ギターを買った。

バンドはどうやらできないらしいが、弾き語りならなんとかなり  
そうだったのだ。

しかし、またしても驚愕の事実が私を打ちのめす。

不自由な右手では、とてもギターなど引けそうにないのだった。

神よ！ 私は絶望した！！

そうして私は楽器を諦め、ただ歌を歌うことにした。清らかな乙  
女の歌である。これはウケるに違いない。

屋上はいつも私の練習用のステージになった。

そうして幾日かたったころ、屋上に訪問者が現れた。

見知らぬ男の子だった。

「あの……ドラゴン、さん？ 毎日なにやってるの？」

遠慮がちに尋ねてくる男の子。これは早くも春の到来だろうか。  
夏なのに、春。私の青春は、今まさに冬眠から目覚めたようだ。

「あの……毎日一生懸命何かやってるとこ悪いんだけど、屋上って立ち入り禁止なんだよね……」

ぬか喜び！ 自意識が過剰だった！ 人生そんなに甘くなかった！生徒会の役員だという男の子に叱られ、仕方なく屋上を後にする私。もうこれで練習する場所がなくなってしまった。

しかし、私は思いつく。

もう十分なのではないかと。もう精一杯がんばったのではないかと。

引っ込み思案な私がここまでやったのだ、もう十分だろう。

そう、歌の練習はもうこれで十分だ。あとは本番に臨むだけ。

あの男の子はそう思って、私の過剰な練習による体力の損耗を防いでくれたのだろう。なんていい人！

そして本番の日はやってきた。

私が体育館のステージに登場するなり、観客がどよめく。

「ドラゴンだ……」「なんでドラゴンが……」「あれって……ドラゴン？」

悲鳴のようなざわめき。

これが温まった舞台という奴なのだろうか。なるほど、心地よい緊張感だ。やれる。私はやれる。誰よりも上手く！

熱唱だった。

魂を振るわせるような、熱いステージだった。

世界はまさに、私を中心にまわっていた。

しかし、私に友達ができることはなかった。

やはり、この右腕のドラゴンの爪がいけないのだろうか。

しかし、私は諦めない。

きつとどこかに、私の友達はいるはずだから。

## 再会、変わらぬ愛する人

友達のいない少年が、ひとり。  
家族のいない老婆が、ひとり。

### 老婆と少年。

昼下がりの公園で、彼らは出会った。

老婆は少年に昔話を語った。

それは少年の知らない、彼女の物語の続き。  
それは彼らにとって、とても充実した時間となったのだった。

毎日のように彼らは公園のベンチに座った。

空はとても晴れていて、雲ひとつない。

夏が過ぎ、秋になり、やがて冬がきた。

それはとても寒い冬の日だった。

老婆は公園に現れなかった。

それでも少年は老婆を待ち続けた。

やがて夜になって、朝が来た。

ついに老婆は現れなかった。

それは彼らが出会ってから、初めてのことであった。

その日、老婆は命のぬくもりを失ったのだった。

そうして老婆は少年に再び出会った。

老婆のその姿は、少女になっていた。

「ずいぶん待たせてしまったわね？」

「君の遅刻にはなれてるよ」

少年は少女を見て笑った。

少女は少年の姿に涙を浮かべた。

彼らの時間は、今、再び動き出した。

彼らは再び出会ったのだ。

いつか晴れたら会いに行く

ある日ある時ある場所に少年と少女がいました。  
少年と少女はとても仲良しでした。

それはある雨の日のことでした。  
川で溺れた犬を助けて、少年は溺れてしまいました。  
もう少年に会えないと知った少女は、とても悲しみました。

少女はそれから雨が嫌いになってしまいました。

ある日ある時ある場所に雨が嫌いな少女がいました。

少女にはとても仲良しの少年がいました。  
でも、少女はもう少年に会うことはできません。

少女はいつまでも泣き続けました。  
少女の涙はいつしか雨になりました。  
少女の嫌いな雨になったのでした。



## 妖精

冬の寒い日。ポケットの中から出てきたのは三角帽子をかぶった妖精だった。

雪が降り積もり、ダンボールの豪邸は暴風によって無残にも破壊され、凍死寸前まで追い込まれたクリスマスの夜。神さまは彼に聖夜の奇跡をお贈りになった。つまりところ三角帽子の妖精である。

ポケットからちょこんと顔を出し、悩ましげな視線を彼に向ける妖精。しかし、彼はそんな視線など感じる余裕などはないのだった。空腹のみが彼を支配していた。刹那的な生にしがみつこうとする彼の五臓六腑。うつろな瞳で曇る空を見上げる彼。しかし、その姿は妖精には自己の存在の無視にしか映らなかった。

せつかく不幸な彼に幸福を与えんと現れてやったというのに。無視。虫けらに無視された虫サイズの妖精。妖精はその怒りに震えた。「よかろう……そこまでこの妖精さまを侮辱した人間は貴様が始めてだ。褒美を与えてやろうじゃないか」

そうして妖精は背中から自身と同じほどの背丈のマッチ棒を取り出すと、それを彼の衣服でこすり上げ、紅蓮の炎を灯らせた。ゆらゆらと燃え盛るマッチの炎が彼に語りかける。

「ヨー兄ちゃん、クタバリそうナノか？ イマおれガ助ケテヤルゼ！」

そうしてマッチの炎は彼の衣服に燃え移った。それはもう聖夜にふさわしい聖母のようなぬくもりのある炎だった。グズグズブスと燃え上がる彼に妖精は肅々と語りはじめる。

「これでもう妖精さまを無視するような暴挙はできまい。ふはははは………うあああiiiiiiiiiiii！ 焼けてる！ おい！

俺まで焼けてるって！」

「オイオイ馬鹿イッチャイケナイぜ。ポケットにハイッテだダカラトウゼンダロ？」

「なんとかしろおおおお！ あちいいいい！ げっ、帽子まで焼け始めたぞ！ 早く何とかしろおおおおおお！！」

「ムリ。オレのセンモンハ燃ヤスコトダゼ。オマエさんモシッテンダロ」

「うわああああ！ こいつ使えねええええええっ！！」

妖精の絶叫はシンシンと降り積もる雪にかき消されていった。

彼は何とか消し炭になる前に妖精によって助け出された。なんとか一命はとりとめたものの、全身包帯のミイラ男になってしまっていた。ただでさえボロボロだった彼のダンボールハウスはその燃えやすさも手伝って全焼。みごとに彼は住居を失ったのだった。

住所不定無職。もともとこの肩書きを持っていた彼ではあったが、これによって正真正銘の家なき子に成り下がった。それもこれすべては神の御力によるものである。

ねこ

それはとても晴れた日だった。猫が死んだ。

野良猫だったが、半分以上は飼った猫のようなものだった。いつも庭で寝ていた。昼には残り物を餌にした。食べ終えたらすぐにどこかに消えていく。

夏。トンボを捕まえては彼に与え、蝶を捕まえては彼に与えた。高く屋根まで放り投げてでも綺麗に着地する。それが楽しくて何度も何度も放り投げた。いつしか彼は僕を見たら逃げるようになってしまった。

それはいつ頃からだったろうか。僕が近づいても彼は逃げなくなった。僕が少しだけ大人になって、彼に悪戯をしなくなったからだ。と僕は思っていた。思い返すと、それは違ったのかもしれない。きっと、彼にはもう逃げる体力がなかったのだ。

ヒゲをなで、頭をなで、喉をなでた。

彼はクルル、と喉を鳴らし、煩わしげに僕を見る。

そして彼はその姿を隠した。

## 右足のない猫

八百屋さんの屋根の上、右足のない猫がお昼寝。  
そこへ魚をくわえた猫がやってきました。

「何で君の右足はないんだい？」

「それは僕が3本足で歩くことができるからさ」

右足のない猫は長いヒゲを揺らして答えました。

燃える夕日の中、右足のない猫が街を歩く。

猫は、犬小屋で食事中の犬の前を通りかかりました。

「3本足で君は不自由じゃないのかい？」

「鎖につながれた君よりはいくらか自由さ」

右足のない猫は長い尻尾を揺らしながら答えました。

## また、あした

何もない部屋で、天井を見つめる。見慣れた景色がそこにはあった。毎日、朝と夜に見上げた天井だ。なにも変わらない。いつも通りの。

きっと僕がここからいなくなっても、この天井はこのまま変わらずに世界を見下ろすのだろう。僕のいない世界を。違う誰かが暮らす世界を。

そつと、壁に触れる。ひんやりと、冷たい感触がした。まるで、ここを去る僕を責めるように。

外に出ると、空気が痛いほどに冷たかった。

見上げると、星のない夜空。

「この景色ともさようなら……か」

どこにでもあるような住宅地の一角。滑り台しか遊具のない、小さな公園のベンチに腰掛け、僕は呟いた。

公園の入り口で買ったコーヒ―は、僕の冷えた手を温めて温くなる。そうして温くなったコーヒ―はいつもより苦い味がした。

まるで僕が触れたものの全てが冷たくなるような錯覚。見上げると、ちょうど月が雲に隠れるところだった。

カン、カン、カント、遠くで電車が過ぎる音がする。

きっとあの電車は明日もこの時間にここを通るのだろう。その次の日も。そのまた次の日も。

僕は寂しさのあまり、電車にまで嫉妬した。それを自覚して、溜息をつく。

「僕の故郷は、ここだよ……」

次にまた生まれてくることがあったとしたら、またここがいい。

そう思って、僕は夜空に叫んだ。

それは僕の後悔の叫びだ。

空は海よりも広く続いている。

だからきつと、いつか流れて届くはずだ。

## 愛する君に宛てて

君が死んでしまってから、もう一週間が過ぎた。僕が作った小さなお墓で、満足してもらえているだろうか。静かに眠れているだろうか。

眠れない夜があると、君はよくないものだ。すぐるように、僕の膝の上でなく君の頭をよく撫でたっけ。なきつかれて眠る君を、僕は何よりも愛しく思ったんだよ。

よく晴れた日には、公園に遊びに行つたよね。君は無邪気にはしゃいで、いつも僕を振り回すんだ。何せ僕は体力があまりないからね。疲れて動けない僕を、君は不満そうな顔で見ていたね。僕にもっと体力があつたなら、日が暮れるまで君と遊んでいられたのに。あれから僕も、少しは体力がついたんだよ。君と追いかけて走っても、もう途中でバテたりしないよ。きっと、いつまでも走っていられるよ。

君が死んでしまってから、もう一月が過ぎた。僕は君に、何かしてやれたんだろうか。眠れない夜ばかりで、苦しいよ。頬に顔をすりよせて、慰めてくれる君はもういない。僕はまだ、しばらく泣いて過ごすよ。

でもきつと、僕は大丈夫だから。君がいなくても僕は大丈夫だから。安心して眠っておくれ。

## カオス

体が爆散した。

ボクは魂が爆発して粉々になって宇宙の心に触れるほどに驚いた。その瞬間、まるで魔女狩りにあつて拷問されているかのような苛烈窮まる夢をみたのかと錯覚したほどだ。

しかし、彼女がまるでこれから縊り殺す鶏の首に手をかけるかのように優しくボクの頬に触れた瞬間、爆散して宇宙に広がった心が新たな宇宙を切り開くような清涼な感覚をボクは覚えた。

そうしてボクはキリマンジェロに差し込む朝日のように清々しい感覚に包まれて目を覚ましたのだった。

悪夢は、覚めた。

カーテンを開けると、宇宙の真髄を悟った賢者のような底抜けに明るい晴れ模様だった。そのミント味のガムを噛む最初の一口のような清純な朝日からは、まるで黄金比で形作られた目玉焼きを食べた朝のような、恍惚とした全能感を感じる。それはつまり、目玉焼きが綺麗に出来ておいしかった、などということではない。圧倒的な美の存在感を前にした神の叡智の無力さのような、そんな破滅に向かう死刑囚の陶酔感。うん、今日はとてもいい日になりそうだ。

そうして春先の絶頂のような足取りでボクは登校した。季節はもう冬だったが、そんなことは関係ない。魂は、季節になど屈しないからだ。

机に座り、さあもう一眠り、というところで彼女は現れた。彼女は赤兎馬に乗って戦場を駆け抜ける呂布のごとき圧倒的威圧感を伴って教室の扉を開けたのだった。

我が麗しの姫君の登場である。

彼女の歩く姿は宇宙の最果てを目指す孤独な光よりも美しい。漆黒の殺意を抱く暗殺者の瞳よりも黒いその髪は綺麗に肩で整えられ、



地獄の番犬すら射殺するような眼光は、その銀縁のメガネによって遮られ、この世の全てを彼女から護っている。

「おはようございます、正太郎君。今日もアリ地獄でもがき続けるアリのように退屈しない日だといいですね」

それは我々の如き凡俗が知り得る限り、ただ振動とだけ名付けられた現象であるに過ぎなかった。しかしその声、いや聲は、遙かな深淵 距離においても、時間においても に隔てられた地下墓地において、導なく寄る辺なき信仰を、外界のあらゆるもの、あらゆる外なる概念から守り通さんとした求道者の曇りなき、一途にして頑ななその心さえも蕩かし尽くすこと能うような種類のものではあつたのだ。

魔法使いが破壊の呪文を唱えて街を廃墟に変えるような自然な感覚として、純粋な子供が描くクリスマスの願いのような笑顔を向けてくる彼女にボクはすまし顔で答える。

「アリだなんて、そんな……ボクのような、この身が本当にアリであつたとして、アリクイにさえ一顧だにされ得ず、類人猿にすら歯牙にもかけられぬであろう不詳の輩にとって、そのお言葉は身に余る光栄であるとともに、満腔に満ちた僕の愛慕の情を、精一杯の言葉であなたに贈りたい」

「いいえ、それは間違つてゐるわ。正太郎君。あなたは人類を至高の頂に導く銀河の星なのよ。もつと一億の敵を滅ぼす英雄のような気高さを忘れない自信と愛と勇氣に満ちた態度をとりなさいよ。そうでなければいけないわ」

「そうかな？ そう……なんだろう？ いやあなたがそう言うんだ、それはきつと間違いのないことなんだろう、うん……何だかやる気がムンムン湧いてきたぞ……！ そうさやってやる、例え一億の敵を目前にしようとも！ ガンホー！ ガンホー！ ガンホー！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！」

そう言つてボクはシュプレヒコールを叫ぶ血の気の多い若者のよ

うに腕を振り回して、彼女に対して地雷原とかした森を竹槍一本で駆け抜けるような自信と、メロスの妹がその夫に抱いたであろう失うことの無い輝きを放つ愛と、眼前に迫り来る白刃をその両の掌で受け止めるような勇気を示してみせたのだった

「その調子よ、正太郎君。勇気を胸に、自信を腕に、凶器を手に宿して、どこまでも行きなさい。あなたが他人に抱くであろう全ての愛は、私がこの手の中で握りつぶしてあげるから」

そうしてボクは、ビックバンを彷彿とさせるような偉大な愛を彼女から受け取ったのだった。もう、何も怖くない。カバンから、黄金に輝いているかのように錯覚するほどに存在感を示している箱を神に生贄を捧げる敬虔な信者のような気分で取り出した。

「今日の御々々<sup>おまもつのおいし</sup>昼御飯です。どうかお収めを……」

「うむ、ご苦労、若者よ。これから励めよ」

気がつくとボクは平伏していた。まるでこれから命乞いを始める武士のような、枯れ果てた樹木のように惨めな姿。それこそがボクの真の姿だった。

「ケキヤー！」感極まった僕は、平伏したその体制から、素早く左小指本腕立て伏せに入った。もちろん、今朝は二エンジンを食べてきた。二エンジンは体内の有害物質を浄化し、正常な状態に導いてくれる。石鹼箱の毒でさえも例外ではないというのだから圧巻だ。

無言で彼女はボクを蹴り飛ばした。顔面を車に引かれた直後の力エルのように引きつらせて壁に激突するボク。死ぬほど痛い。しかし、恐怖はそれだけではなかった。銃弾が、ボクの居たところに撃ち込まれたのだ。「これはアイツラの仕業ね。危ないところだったわね正太郎君」彼女は土にうもれまま幾百の時を過ごしたミロのヴィーナスのように可憐に微笑んだ。

おしまい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0689o/>

---

沈黙の星

2011年6月10日16時25分発行